
3 カウント～高校デビュー～

熊取

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3 カウント〜高校デビュー〜

【Nコード】

N3159D

【作者名】

熊取

【あらすじ】

中学時代に投手として活躍していたが、いろいろあつて止めてしまった一人の少年が周りの人に誘われてもう一度高校になって再開する。
一旦切りがいいと思ったので区切ることにしました。
続きは夏ごろからになるとおもいます。

ブローグ

今日は高校生になってすでに1ヶ月が経った日である。

この日も俺は普通に学校に行ってなんでもない様な事を友達としゃべって、つまらない授業を聞きながら睡眠をとって、最近慣れ始めている帰宅路で帰ろうと思って教室を出て廊下を歩いている時に、「おゝい、ちよつと待ってー!。」と、一人の青春野郎に言われて、思わず待ってしまつてそのまま崩し的な感じで巻き込まれてしまふと言う大変可笑しなことからこの青春物語は始まつて行く。

これはあれよあれよと言う間に巻き込まれてしまつた少年とその周りの人達によって作られていくお話である。

第一話

zzz・・・、うん・・・んんっ。

ここは何処だ、あつ学校か。何で誰もいないんだ？そういえば6時間目の世界史の時に居眠りしたな、と言うか誰も起こそうとは思わなかったのか？もう5時過ぎだぞ。はあつ、いつまでも愚痴つててもしゃーねーし帰るか・・・ 鍵は閉めないとな。

「失礼しました。」

ガラガラッ、

鍵も返したし帰るか。

スタッ、スタッ、スタッ

「おっ、いつ、ちよつと待ってー」

なんだ、んんユニフォームを見る限りじゃあ野球部か？

「た、頼みがあんだけどさ。」

こいつはクラスでも話したことがあるが、いつもと全然違う感じなので心の中では結構焦った。

「何だ？」

「じゃあ、単刀直入に言うけど・・・明日やる試合に出てくれないか!」

「へ・・・・・・・・どゆこと」

「そうゆうこと」

「いや、そうゆうことじゃなくて。野球部で試合しろよ。」

「実は8人しか今居ないんだわ。」

「少ねえなあ試合できねえじゃん。」

「じゃあ試合断ればいいだろ。」

「いや、断れないから困ってるんだよ。説明したら少し長いけどいいか」

「気になるからはよ言え。」

「さつきも言ったように俺らは試合できる人数じゃねえだろ。そんな何時もは1回戦で負けるようでも一様出場は出来てただけ。今年は出来なくなっただ。で、それを言いことに学校側が潰そうとしてきたんだ。だけど俺らはそんなの納得出来なくて止めようとしたんだ。でも向こうは人数なんて関係なしに前から気に入ってた。かったらしくてな。それでもしつこく言ったらなんとか練習試合をして実力を見てそれで決めるって所まで今日妥協してくれた訳だ。」

「長かったなあ。もうちょっと長かったら帰ってる所だぞ。」

「・・・まあ理由はわかったけど・・・今日?」

「ああ30分前位に決まって、だけど俺ら8人しかいないから明日

だけでも出てくれる人を探そうって言ったんだけど、もう学校には部活してる奴しかいなくて途方にくれてた時にお前が廊下を歩いてたんだよ。」

まああんな時間まで普通の人は学校にいないよな。

「で、俺に声を掛けたと。」

「ああ、なあー頼むよ明日だけでも良いから出てくんないかな。」と、言って頭を下げて来た。

はあ~~~~っ面倒なことに巻き込まれたなあ。

「しゃ〜ねえ。明日は特にやることもないしいいよ。」

「まじでか！！ありがとう。」

「だけでもう今日はもう帰るぞ。」

「ああ、明日の事はまた後で連絡するわ。じゃあ皆に言ってくるから。バイバイ。」

そして、元気良く走って行った。

野球・・・か。

久しぶりだな。まあ、それなりに楽しませてもらうか。

第二話（前書き）

少し長いです。

第二話

試合の場所は学校関係者が見やすいようにとの配慮で学校でやることになり、試合開始時刻は午後一時からに決まった。

だが、試合前に練習もするので9時集合と言われて、今時間に合わせて学校に向かっているところである。

はあつ、何で俺まで朝っぱらから練習なんてやらなくちゃならないんだまつたく。とは言っても特別扱いの方がやけどな。それにしても勝てるんかねえ。相手チームも弱いとはいっても毎年一回戦敗退の内よりは強いんじゃないか？それにそもそも今勝てるぐらいなら部を潰す話も出なかったんじゃないか？

等といろんなことを考えてる内に学校に到着した。

ちょっと早く来すぎたかな？まだ45分位だからなあ、誰かは来てるだろうしグラウンドに行ってみるか……。

グラウンドに付くと、予想通りに2人の人が居て一人は今日此処に来る原因になった人物の間野で、もう一人も見たことはあるのだが、思い出せない。だが、少なくとも同学年で無いことはわかった。話し掛けてみるか。

「おはよう、間野初めまして俺は 森下 光です。今日は楽しんでやるつもりです。」

「うん。そうしてくれて構わないよ、それに、今日はありがとう来てくれて。僕たちも突然のことでかなり困ってたんだよ。あと、紹

介が遅れたけど僕は主将をやらせてもらっている　白岡だよ、よろしく。」

あゝあゝ、そうか、そうか、この人この前の部活紹介の時に見たんだ。それにしても、主将か、・・・まあこの人ならちゃんとやれそうだな。」

「ところで、利腕はどっちなのかな？あと身長はどれくらいかな？」

「左利きで、身長は１７０センチぐらいです。」

「じゃあ、僕は左用のグローブとユニフォームを取ってくるから。」
と言うと直ぐに走っていった。

主将の姿が見えなくなるとほぼ同時に新しく２人の人がグラウンドに入ってきたが、多分野球部員だろうと思って挨拶することにする。

「ちわゝす。今日だけの部員の森下です。」

すると、俺より背の低い方の人かなりハイテンションでしゃべった。

「よろしく僕は二年生の瀬谷だよ。」

それで、次に背の高い、と言うよりヒョロイ方が

「ぼ、僕も、・・・に、二年生、の、・・・相川、です・・・。」
ところどころ言葉を切りながらしゃべった。

「相川君はねゝ、かなり人見知りする人でゝ、初めてあった人としてしゃべる時はこうなるんだよ。」

「あー、そうなんですか。」

俺、そんなに疑問そうな顔してたかなゝ？つかこの人今日かなりの人が試合見に来るらしいのに、こんな状態で大丈夫なんかなゝ。
あれ、今気付いたけどもう練習し始めてる人が二人いる。

「なあ、間野。向こうにいる人は誰なんだ？」

「あゝ、あの人達か。先に走ってる方が二年生の羽村先輩で後ろの方が一年の竹橋だよ。ちなみに羽村先輩はかなり熱血的で今日は一年ぶりの試合だからって言って昨日から張り切っていて竹橋はそれに巻き込まれてるんだ。」

確かに、そんな感じるなあ。竹橋の方はなんか嫌々やってそうに見えるからなあ。羽村先輩には関わらないようにした方が良さそうだなあ。

「あ、また一人グラウンドに入ってきたやつが巻き込まれた。あれ誰だ？」

「あの人は三年の戸塚先輩だ。」

はあゝゝゝつ、あの人三年生までも影響及ぶんかよ。ヤバイなあ。俺とか普通に巻き込まれそうで少し恐いけどなあ。今気づいたけどもう集合時間越えてるな！。それにキャプテンも遅いなあ。

「おっはよう！！」

「うわあつ。えゝつ、とおはようございます。」

先輩との接し方について考えてると、いきなり後ろから声を掛けられたのでかなり驚いた。

「あはははっ、ごめんごめんそんなに驚くとは思わなくてな。俺は二年の田崎だよろしくな光君。」と、言って部室の方に歩いていった。

「あの人はいつもあんななんかな？」

「ああ、ジョークの好きなユニークな人だぜ。」

なんか個性豊かな人達だなあ。

「なあ、後は監督で全員か？」

「いや、多分監督は今日来ないんじゃないかなあ。面倒なことが嫌

いな人だから。それに一年のマネージャーがいるぞ。」

「ふうん、そうなのか。」マネジはいいとして、監督不在って部としてどーなんだ。

「森下君ユニフォームとグローブ取って来たけどそれでいいかな？
もしいいんだったら着替えて来てくれるかなあ。」

「はい、着替えてきます。」

服はまあまあだけどグローブは年期入ってるなあ。多分キャプテンが戻って来るのが遅かったのはこれを探してたんやろうなあ。じゃあ間野は俺の利腕知らなかったんか。まったくそれぐらい調べとけよなあ。体育の時間以外に体動かすのなんてずいぶん久しぶりだなあ。体ちゃんと動くかな？

「おはよう。森下君だよねえ。私はマネージャーの永谷だよ。今日はありがとう試合に出してくれる事になって。」

俺が部室から歩いて行っててグラウンドの前まで行った時に声を掛けられたので振り向くと可愛い人が話し掛けてきていた。

「まあ今日は俺も楽しんでやろうと思ってるし、それにかなり下手なこととして逆に迷惑になるかも知れないから感謝すること無いと思うけど。」

「そんな事無いよ。」

「まあ兎に角感謝するなら終わってからでも遅くないと思うよ。」

「フフツ、わかった。そうする。」

「おーいー！もう着替え終わったんなら、仲良くしゃべってないで早くアップ始めるぞ。」

「はい！はい！じゃ、行つて来るわ。」

今はランニングを終えてストレッチをしている所である。

「羽村先輩達早いなあ。もうキャッチボール始めてるじゃねえか。」

「そうかあ、いっつもあんな感じだから。もうあまり気にならないけど。」

やっぱりいつもなのかよ、あの人はテンション高いのとか関係なくいつでも自由行動なんか。

「おい、間野キャチボールやるぞー。」

「はい！！じゃあもうストレッチも終わろうぜ。」

間野は田崎先輩の所に行った。

おいおい、皆もうキャチボールの相手も決まってるじゃねえか。どうするか……おっ、一人だけまだいたなあ。話し掛けてみるか。

「なあ、俺キャチボールの相手いないんだけど一緒にやってくれな
いかなあ。」

「え、私。」

俺が話し掛けたのはマネージャーだった。もちろんちゃんと右用のグローブも持って、

「うん、そう。あつてる、下手でも良いから一緒にやろつ。」

「本当に下手だからね。」とすねたような顔をしながら返事をして乱暴にグローブを取って走っていった。

少し言葉が過ぎたかなあ。

シュ、パスっ・・・、シュ、ヒョロツ、ヒョロツ、パシ。シュ、パスっ・・・、

「ククツクツクツ。」

むっ、

「だから下手だって言っただじゃん。」

シュ、ヒョロヒョロ、パシ

「ごめんごめん。」

シュ、パシッ。

「でも、大分うまくはなつてきてるよ。」

シュ、ヒョロヒョロ、パシ

「ほんとかなあ。」

シュ、パスッ。

「本当だつて、最初は投げ方とかが面白かったもん。」

シュ、ヒョロヒョロ、パシ

「でも、今は様になってきてるし。」

シュ、パシ。

「ありがと。うん・・・それにしても」

シュ、ヒョロツ、ヒョロツ、パシ

「何でそんなに森下君はうまいの？いっつも構えてる所に投げてる

じゃん。」

シュツ、パスッ

「うーん、何でかなあ？」シュ、ヒョロヒョロ、パシ

「何ではぐらかすのかなあ。」

皆ー、そろそろキャチボール終わりにして。

「終わりだつて。」

「教えてくれてもいいじゃない。」

あらら、またすねてるや。

「じゃあ、少しだけ見せてあげるから。皆には言わないでね。」

私は言っている意味が分からなかったけど少し待ってみることにした。

「じゃあ、行くよ。」そう言つて、ネットに向かつて綺麗なフォームでボールを投げた。ボールはぐんぐんと伸びて行つて当たつて落ちた。

森下君からネットまではちょうどマウンドからホーム位は離れていたけどその間をボールは全く落ちなかったと思う位に伸びて行ったのだ。あんなに綺麗に見えるフォームも始めて見た。私はなんだかわけが分からなくなつて

「行こう。」

と、森下君に声を掛けられるまで固まつたままでいた。

第三話

「次は守備練やるから、守備位置つけー。」
と、キャプテンが言うのと皆は直ぐに動いて行った。

「なあ、間野。俺はライトだよなあ。」

「外野は全員って言っても三人だけど、兎に角センターに行けばいいから、行こうぜ。」

今は練習を終えて休憩時間になったので間野と雑談をしている。

「それにしても、お前って結構野球できるんだなあ。」

「まあ、俺は運動神経が凄いからなあ。」

「うっわあー、お前そうゆうこと自分で言うなよな。」

「誰も言ってくれないから自分で言ってるんだよ。」

「でも、お前がそれぐらい出来て良かったわ。」

「は？何で？」

「あんまり下手な事してたら羽村先輩が・・・て事になりそうだからな。」

おいおい、どうゆう事になるんだよーっ。しかも、遠くを見る様な目をして青ざめながら言うなよ。それにしてもあの人何をしたんだ？聞きたく無いけどな。

「なあなあ、さっき思ったけどこのチームってピッチャーいないの

か？」

「ふむ。何故にそう思う？」

「さっきのノックでキャプテンがマウンドで受けてたけど、どうも動きがぎこちなかったから。」

「ああ、確かにピッチャーはいなくなてな。キャプテンがやり始めたのも最近だしなあ。」

「何で？」

「今年入って来る一年生にピッチャーがいるんじゃないかと思って練習してなかったらしい。それに、中学までに一度でも経験があるのはキャプテンだけだったんだよ。」

「おいおい、ちゃんと練習位しとけよな。あと、本当に試合大丈夫だよ。」

「あまり関係無いとは言えかなり不安だなあ……。」

「あつ、おい。森下対戦相手が来たぞ！」

「そう言われてグラウンドの外を見ると何人も人がいた。」

「あれ何処の高校なんだ？」

「確か田中高校だったと思うぞ。」

「は……っつ、なんだその一見平凡で覚え難そうに見えて印象に残りそうな高校は……！」

「それで、其処はどれぐらいの強さなんだ？」

「頭では名前の事にかなり触れたかったが、今一番大事なことを聞けなくなる気がするから、其処は押さえる事にした。」

「本当かどうかは知らんが戸津先輩によるといつも一回戦か二回戦で負けるとこで14人しか部員もいないらしいぞ。まあお願いして直ぐに試合受けてくれるような所だからなあ。」

「そうだなあ、強い所だったら一日二日前に試合申し込んだところ

で断られるだろうからなあ。」

相手がアップをしてる間にこっちは締め練習も終わらせたので後は相手が終わるのを待つだけである。

「相手もそんなに強くはないみたいだけど、一人凄いデカイのがいるなあ。」

「ああ、あのキャチな。さっき聞いたけど、あれ俺らと同じ一年らしいぜ。」

「マジかよ！！あれ多分185はあるぜ。」

「それも凄いいけどもつと凄いのがゴツさだな。何をしたらあんなムキムキになるんだろうな。」

「でも、まあそれよりもドンだけ観客いんだよ！！！！どう見積もっても50以上はいるぞ！！それにあれこれからもつと増えるんだろ。」

「さっきまでは全然居なかったのだが相手チームの人達が来た辺りから段々と増え始めたのである。」

「ああーもう。あんま気にしないようにしてたのにーなんか緊張してきた。」

「そつだよねー緊張しちゃうよねー。」

「瀬谷先輩が言つとイマイチそつう風には見えませんがねえ。」

どちらかと言うと楽しんでる感じがするんだよな！。

「おい！お前ら。緊張したからってエラーでもしたら許さんぞ。」
怖っ、羽村先輩はやっぱめっちゃこええな。

「だってさ。ミスったらどうする？光ちゃん。」
うつわっあっ、この人は！

「何でいつも背後から声掛けるんすかあー！！他の人にはちゃんと前からでしょうが。」

「だって一番反応が面白いんだもん。しょうがないじゃん。」「あーはい、そうですか。じゃあもうそれでいいですよ。」

「おい！！お前ら俺の話を聞いてたのか？！！」

「あーあーはいはい。聞いてまし・・・た、よ。」
うつわー、やつべー田崎先輩の時と同じ様に言っちゃった。

「ククククツ、クツ、クツ、はーっハッハッハッハ。」
こっええええーよ。ヤバイよ。

「いい度胸だな。試合楽しみにしてるからな。」
この言葉だけ残して笑いながら歩いて行った。

「どうしたらいいと思います、田崎先輩？」
背中が冷や汗でいっぱいになってるや。

「俺は知らん。兎に角頑張っ生きて生きろ、じゃ。」
クツッ、あの人逃げやがった。で周りを見てみると、皆が少し哀れんで見てる中で一人目をキラキラさせて見てるやつがいる事がわかった。

「竹橋お前どうしたんだ？」

「すっげーす。あの羽村先輩にあんな事言えるなんて。俺なんていつもビクビクして言うこと聞いてるだけなのに。」

そういう事が。確かにこいつ良いように使われてるもんな。「いやそれは勘違いだと思うぞ。それにあの人は誰でも怖い。」

「勘違いなんかじゃないっすよ。あとこれからは師匠と呼ばせてもらいます。」

「そんな呼び方はするな。それから敬語は止めてくれ。」
「嫌です。」

即答かよ。言われるの解ってたみたいだな。

「諦める。お前はそういう運命なんだ。」
「人事だと思いやがって。」

「元はと言え「もうすぐ始まるから集まれー」……………」
そして、間野が肩に手を乗せて

「頑張れ。」と言われてももうどうでもいいや、と思った。

《試合オーダー》

三越高校

1番 遊 竹橋 右投右打

2番 二 瀬谷 右投右打

3番 一 相川 右投左打

4番 捕 羽村 右投右打

5番 投 白岡 右投右打

6番 三 田崎 右投右打

7番 左 戸塚 左投左打

8番 中 間野 右投右打

9番 右 森下 左投左打

田中高校

1番 中 志波 右投左打

2番 三 斉藤 右投右打

3番 右 宮本 左投左打

4番 捕 村田 右投右打

5番 一 中津 左投左打

6番 遊 西村 右投右打

7番 左 森田 右投右打

8番 投 小山 右投右打

9番 二 渡部 右投右打

先行 後攻

田中 × 三越

「両チーム集合！！それでは田中高対三越高の試合を始めます。礼
！！」

「お願いしまーす」

「おめえら、行くぞ！！」「おう！！」

何でキャプテンじゃなくてあの人が言うんだ？

「プレイボール！！」

第四話：プレイボール！！

「プレイボール！！」

の掛声と共に先輩の足が上がって白岡先輩はスリークォーターで右腕からボールを投げた。

初球はぎりぎり外に外れてボールですぐに二球目も投げた。

《キイイーン》当たりは良かったがサードの真正面でワンアウト。

次のバッターは真ん中近くに行つた初球を引っ張ってレフト前ヒット。

続く三番は初球は見送りのストライクでその間にランナーが盗塁で二塁に行った。

（やっぱ、一ヶ月ぐらいじゃセットモーションまでは出来なかったみたいだな。楽々と盗塁されてるからな。）

二球目は内角にボール一つ分ぐらい外れてボール、そして次の外角のボールを引っ張った。

「ライト！！」

（もう、外角のボールは流せよ。）

ちゃんと打球は捕球したが内野にボールを返す時にゆっくりしていたのでタッチアップをされてツーアウトランナー三塁でバッターは試合前に話していた一年の四番。

バッターボックスに立って構えると普段より大きく見える。

（キャプテン大丈夫かなあ。）

そんなふうにいると案の定初球の真ん中近くの甘く入った力
ーブをジャストミートされボールはフェンスを越えて行った。

（あっちあゝ、いきなり二点も入れられちゃったよ。それにしても
随分呆気なかったな。）

次のバッターは四球目のボール球を引っ掛けてセカンドゴロでチェ
ンジになった。

「おい！！お前ら取られたもんはしょうがねえ取り返せ！！」
と言う言葉も虚しく三者凡退に終わった。

「まだまだチャンスはあるからしっかり守れ！！」

「はい！！」

（皆負けてても楽しそうではないな。俺も・・・でもなあ。）
少しずつ何かが変わって来てるのである。

「野球部！しっかり守れよ。」

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

2回は先頭バッターにヒットを打たれて次のバッターがバントでワ
ンナウト二塁とまたピンチになったが次の8番をピッチャーゴロに
打ち取って9番もカーブを引っ掛けてショートフライでチェンジに
なった、

と思ったが以外と打球が伸びてレフト前に落ちるポテンヒットにな
ってツーアウトだったのでランナーが返ってきて三点差になった。

続く1番はいい当たりをされたがショートがうまくさばいてこの回

も終わった。

「キャプテン気にすんな。」

「取られたら取り返せですよ。」

「まだ三点、三点。」

（皆、本当に楽しそうだなあ。）

「おいおい、野球部大丈夫かよ。こっちの攻撃はそっこーで終わったのに。」

「もつと頑張りやがれー。」

（・・・・・・・・・・・・・・・・クツ）

この回は先頭バッターの羽村先輩がヒットで出塁したが後続を抑えられて1点も入らずにチェンジになった。

「校長先生やつぱり野球部は廃部になりそうですね。」
バックネット裏である生徒が校長に言った。

「そうですね。まだ2回しかやってませんよ。」

「わかりますよ。だって過去の成績を見てもほとんど勝ったためしがないですから。」

「わざわざ調べてくれたんですか？」

「こんなこと、この学校の人ならだれでも知ってますよ。」

「でも、皆まだ全然諦めてませんよ。まあ終わったら分かりますから、最後まで付き合いましょう。」

そして、試合は次の回から少し予想してなかった結果になっていくのだった。

この回先頭の2番バッターにいきなり不意を突くセーフティバントを食らっていきなりノーアウトからランナーを出してしまった。

そして、キャプテンは盗塁を警戒しすぎて真ん中付近にボールを投げてしまい左中間へのタイムリーツーベースを打たれてしまった。

（これで4点差か。次取られたらヤバくなるぞ。）

そして、内野陣はタイムを掛けて話し合っている。

（どうすんのかな、このタイミングで話すことって言っても勝負が敬遠かだろうしなあ。）

「もうこれじゃあ無理だろ、終わりだな。」

「確かになあ。」

「なあ、この回終わったらどっか遊びにいこーぜ。」

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、俺って忍耐力ねえなあ。あいつの頼み聞いた時からこうなるとは思ってたんだよなあ。）

side 内野

「おい、どうするよ。次取られたら厳しいぞ。」

「このタイムはあのおっさんをどうするかってことか？」

「そうだ!！」

「お前は少しボリュームを落とせ。一々喧しいんだよ。」

確かに羽村の声は相手のベンチまで聞こえて行きそうなくらい大きく、近くにいたものはたまったものではないだろう。

田崎はこの中でも一番羽村を嫌っているので注意をした。

「何だと貴様!!！」

当然、羽村は怒る。

「だから、喧しいって言うてんだよ。」

「ふ、2人とも、お、落ち着いて。」

「そ、そうですよ先輩。」

このままでは流石に拙いと思って相川と竹橋が2人を止めようと声を掛ける。

「うーん、僕はねー、キャプテンが決めたらしいと思うなー。」

瀬谷に至っては、二人が言い争っていて2人が止めようとしてるのを目の前で見ているがもう無視してキャプテンに話し掛けている。

「・・・・・・・・・・僕が決めるんなら、ここは一塁あいてるし歩かせるような感じで厳しいところを突いて行った方が・・・・・・・・」

「本当にそれでいいんですか？キャプテン。」

その言葉を聞いて、羽村の事なんてどうでも良くなって話しの途中で思わず声を挟んだ。

「・・・・・・・・・・う」「それはそれで不味くないですか？それに、そんなことしたら観客全員帰っちゃいますよ。」・・・・・・・・・・」

「そうだな、今でさえ・・・・・・・・・・」

「ああ、少しまずいな。それにあいつはまだ・・・・・・・・・・」

「うーん、そうだねー、光君。」

「「なぜお前がここにいる。」」

いきなりここにいるはずのない人物が普通に話し掛けて来て直ぐには気づかなかったが、冷静になってみるとかなり違和感があることに気づいて、ほぼ2人同時に言葉が出た。

最も、瀬谷にはそんなこと関係ないみたいだが。

「それは、やっぱり話し合いに混ざりたかったからでしょ？」

「いや、いや。俺らに聞くなよ、てかお前外野からわざわざここま
で来たのかよ。」

「当たり前でしょ、何言ってるんですか。．．．．．それ
で、どうするんですか？キャプテン。このままだったら5回には試
合が終わってそうなんですが。」

ここで話を本題に戻すことにした。

「．．．．．僕は四球でも良いくらいで行こうと思ってる
んだ。」

その答えを聞いて少ししてから言った。

森「．．．．．そうですね。あの、皆さん
には悪いんですが、ちょっとだけ羽村先輩とキャプテンと話したい
んですけど．．．．．？」

それを聞いて、意外にも直ぐに白岡はわかった、と言うと3人を残
して守備位置についた。

「話して何だ？」

「先輩はキャプテンの球で抑えられると思いますか？この回だけの
話じゃあなくて。」

「．．．．．無理だな。」

「でしょ、このまま黙ってやられたくないんだったら賭けに出てみ
ませんか？」

「．．．．．どういうことだ。」

「見ず知らずの俺にやらせてみませんかっってことです。」
羽村は驚いたが、白岡の方は全く驚いたようなそぶりは見せなかった。

「……………大丈夫……………なんだよね。」

この言葉を聞き、森下の雰囲気が少し変わった。

「はい、大丈夫です。」

「じゃあ、頼んだよ。」

白岡は笑ってそう言って、審判の方に行った。

「おい!!お前……………」

うつわうつ、何言われんだろー、怖く、この沈黙嫌だなー。

「しつかりやれよ。点取られたりしたらただじゃおかんぞ。」
こえーよ。全くキャプテンみたいには言えんのかよ。

それから、守備の交代をキャプテンが告げて森下はマウンドに、白岡は外野に行った。その時、田崎が何か言っていたのだが、森下は無視して投球練習を終わらせた。

やっと一人で落ち着けたな。

お、なんか皆こっち見てら。瀬谷先輩は驚いてんのか分からんけど、とりあえず……………田崎先輩が怒ってんのは、よく分かる。こっちめっさ睨んでるもん。途中で帰したのは不味かったかな。ハハハ、笑ってくれてんのはキャプテンと……………永谷さん位だな。あ、俺そっいえば下の名前知らねえな。試合終わったら聞いてみよ。

「プレイ!!」

おしつ、気合い入れていくか。

第四話：プレイボール！！（後書き）

更新が少し遅れました。

済みません。

第五話：初登板

・・・・・・・・・・・・・・・・・・静かだ。

森下はセットポジションに入りながら思った。

此の一瞬に何とも言い難い高揚感を感じる。

最初の一球と最後の一球の時の一瞬の静寂。

足を上げて相手を見る。

最初からはないか。

足をおろしながらニコツと笑って、セットからなのは少し残念だけ
どやっぱ最初の一球は・・・・・・・・・・

キャッチャーミットをめがけて腕を振り切る。

ボールは綺麗なバックスピンがかかりながら、・・・・・・・・ミ
ットに収まった。

「・・・・・・・・・・ど真ん中ですよ、やっぱ。」

「ストライークッ!!」

審判の掛け声とともに野球を見ている人達が騒がしくなった。
まだ一球投げただけなのに凄いな！。

さあ、次はどうすつか、・・・・・・・・・・よし。

森下はセットに入ると速いテンポで二球目を投げた。

ボールは内角低めに進んでいき、またミットに収まるかに思えたが、今度はおもいつきりボールを強振した。 ボソッ、（ショート）

ボールはショートの定位置から少しセンターよりの所にライナーで飛んで行き、竹橋が左手を伸ばして地面に着く前に捕球し、ランナーはうまく反応できずに、ショートがタッチしてゲッツーになった。

あつぶね。打たせて取ろうと思ってしかも、思いどおり打たせてヒットとかなりかつこ悪いし何より、……………羽村先輩に何されるか分かったもんじゃねえよ。）

皆がショートの竹橋に声援を送ったが、その中でも森下の声は一際大きかった。

村田「……………ナイスピッチ。」

次のバッターは二球目の外角低めのボール球を引つ掛けて、この回は終わった。

森下は意気揚々とベンチに戻ったのだが、待っていたのは、

「お前！！自信満々に言い切つていて冷や冷やさせてんじゃねえ！！。」

怒鳴り声だった。

まったくもってその通りですね。これについては何も言い返す言葉がありません。

「そうだぞ！！それに何でこんな大事なことなのにあの時わざわざ俺らを返してから決めやがったんだ！！。」

はいはい、分かってましたよ。ええ、分かってましたともそのことを聞かれることはだって一番何か言ってきそうなのが羽村先輩とあなたで羽村先輩とはどのみち話さなきゃならなかったけど、先輩とは絶対じゃなかったからです。簡単に言うとなあなたが邪魔だったからみんな返したんですー。とか、言ってみてー、つかこの二人マジでどうするよ。

そんな事を考えていたら、天からの助けがやって来た。

「森下君は次のバッターでしょ、早くネクストに行かなきゃ。これバットとヘルメット。皆も話す暇があるんだったらピッチャーでも見るなり他の事に時間使って。」

キャプテン、ホントーにありがとうございます。

次のバッターは、間野か。なんとかして塁に出てくれよ。そしたら俺が何とかするから。

素振りを見てるだけだけど、バッティングも出来るみたいだな。

正直俺は今日の試合なんて本気じゃなかったし、あいつにだって断られても構わなかった。

けど、なんかこのままじゃいけない気がするんだよな。

大げさに言ってみたらこんな場面でやる気が起きないなら、もう一生何も掴めないような気が。ホントに少し大げさだな。でも、今は

やる気十分だぜ。……………ありがとな。

「ピッチ、こーい!!。」

間野は初球から思いっきり振って行つたが、初球はボール球を、二球目はカーブをかなり見当違いの所を振って空ぶつてしまい早くも追い込まれてしまった。

くそっ、当たる気がしねえ。俺中学の時からろくにヒットなんて打つたことも無かつたし、……………

「間野!! 落ち着け、兎に角当てる!!。」

……………そうだな。ヒットなんて打てなくてもいい。兎に角当ててやる。

間野はバットをグリップいっぱいまで持つてバットを構えた。

3球目は直球をなんとか掠らせてキャッチャーがボールを取り損ねてファールになり、続く4球目はボール次も外れてカウント2-2となった。

そして、5球目のカーブを引つ掛けた。

だが、打球の方向はサード方向とよく、当てただけなのでボールも転がっていかず、結局間一髪のところの間野がボールより先にファーストベースに辿り着きセーフになった。

「ナイバッチー。」 「いいぞー。」 「続け続け。」

よっしゃー、ナイス間野でかしたぞ。

あれ、そういえばサインとかってあるのか？

「様見ておくか。・・・うわー、何かキャプテンがサインっぽいの出してるー。どうしょ、いや待て待て落ち着け。・・・・・・・・・・・・・
・・・そうか、初球ヒットを打てば・・・・・・・・・・」

「タイム。」

そんな訳に行くか。

そして、キャプテンに聞いたところサインは一樣出しているだけで俺は気にしないでいいと告げられた。

「プレイー!!」

森下はゆるく構えていたので初球は見逃すものだと言っていたが、思い打順も9番ということもあって真ん中に投げた、が甘かった。

ど真ん中以外ならそのまま見送っていたが、何とも予想通りに投げてくれたのでこの球を右中間に持って行った。

このグラウンドは結構広くてボールがよく跳ねるので奥の方まで転がっていき間野は悠々とホームに帰って来て、森下は無理する場面でも無いので3塁で止まって4 - 1と3点差になった。

「ナイスバッティング!!」

「いいぞー!!」

やっぱり点を入れると声の掛けられ方が違うよなー。

次のバッターはトップに代わって2回り目の竹橋である。

まだ序盤で3点差も付いているという事もあり、守備は定位置から少し前に出た形になった。

相手チームのピッチャーは今不用意に打たれたこともあって少し慎重に投げようと心掛けていったのだが、少し気にしすぎたのかストレートのファールボールになってしまった。

ピッチャー大分焦って来てるな。

2番バッターは瀬谷先輩で、この人は身長が低いにもかかわらず構えもコンパクトにまとめているのでストライクゾーンがかなり狭い。だが、ランナーは一番なのでバッターにだけ気を取られる訳にもいかず、結局ランナーの方もバッターの方に対する注意も散漫になってしまつて、竹橋はチームの足を生かして盗塁を仕掛けて瀬谷が外角高めの甘いストレートをうまくライトに流し、竹橋は三塁まで走りランナー1、3塁でまだノーアウトの2点差になった。

森下はベンチに帰ってくると直ぐに間野と一緒にブルペンに入った。

「皆よく打つなー。・・・ポテポテの当たり打つたの俺だけじゃん。」

「ハハッ、贅沢言つなよ。ヒットだったんだからいいじゃん。・・・それよりももう座ってくれ。次の回からは変化球も混

せていきたいんだ。」

3回はストレートだけしか使っていない。

そして、森下が言うにはストレートだけだとそんなに特別スピードがある訳じゃないので2回目からは目が慣れて打たれ始め、何より疲れるので変化球で打たせて取っていききたいらしい。

「じゃあ言われたとおり適当にストレート、スライダー、カーブのサイン出していくからな。」

「ああ、頼むわ。……おっ、相川先輩飛ばしたな。」

相川先輩の打ったボールはレフトの後方まで飛んで行ったが、ギリギリ追いつかれてアウトになった。最もその間に2人とも進塁してあと1点差でまだチャンス場面となった。

次のバッターは4番で最初の打席からヒットを打った羽村先輩だ。

この人は他のメンバーとは違って中学の時に地元でだが、名の通るほどのバッターで期待大である。

それにピッチャーは簡単に1点差に詰められその上まだピンチを背負っているのかかなり参って来ているのだが、キャッチャーはキャッチャーでまだ1年生ということと森下のピッチングが気になるらしく、間をとると言う事もせずに構えに入った。

相手は大分焦っていたらしく、初球から内角の少しど真ん中寄りに投げてしまい羽村先輩にその球をかつ飛ばされた。

球はぐんぐん伸びて行って、………フェンスを越えて行った……。

羽村先輩はいつもと違ってクールに黙ってダイヤモンドを回って来てそのままベンチに帰ろうとしたのだが、その前に田崎が現れていいーい、と言いながらヘルメットをバットで結構生きよい良くこずいた。

そんなことをされてもうクールになんていられる訳もなくキャプテンも今はバッターボックスにいて、誰も止める人もいなく田崎が笑いながら逃げるのを叫びながら追いかけてどこかに行ってしまった。

相手も流石に少し冷静になったらしくキャプテンをショートゴロに打ち取り、続く田崎をアウトにして、この回を終えたが一拳に5点を取って逆転した。

竹橋「田崎先輩いつ戻って来たんだ？それに羽村先輩も？」

此处から森下は8回までを打者20人を相手にヒット3本、四球2つ、三振4つと順調に抑え、対する相手はランナーは出す者の最低限の失点にしたので2点の追加点を加えられ3点差で今最終回4番バッターでツアアウト1、2塁の一本ホームランが出れば逆転の場面を迎えた。

ふう、楽しいけどやっぱりピッチャーは疲れるねい。

そこでこの場面ちよっと簡単にツアアウト取ったからって油断は禁

物だな。

でも、ほんと疲れたな。

久しぶりってのもあるけど、あの時以来全然体動かしてなかったからなー。

最後のバッターが4番ってのもいいもんだけどな。

そして、第一球は外角低めにストレートを投げ、バッターはこれを強振したが、ボール一個分外れていたので、ファールになった。

へへっ、いいねえそうこなくっちゃ楽しめないからな。

二球目を投げる時、バッターに集中していたのでランナーの事など頭になくダブルスチールを掛けられ、バッターはワンバウンドしたカーブを空振って、ツースアウト2、3塁ツーストライクあと一球となった。

観客席では皆があと一球コールをしている。

あら、いつの間にか大分人数増えてるな。

何人いるんだ、そっか皆部活の服着てるから部活の人が増えたのか。

あーあ、俺結構今まで地味にやってたんだけどな。

絶対目立っただろ、この分じゃ。

・・・・・・・・・・・・・・・・観客の要望に答えてやるか。

一度息を吸い込み、大きく吐きだした。

森下は大きく振りかぶって三球目の球を投げた。

指から離れたボールは今までとスピード自体に変わりはないが、伸びが違った。

ボールはほとんど沈まずにキャッチャーミットに収まった。

そして、三振した瞬間に静かに左手を天に向かってあげた。

「ワウアアーーーーー。」

その瞬間に誰かが口火を切ってそのあと観客が一斉に盛り上がった。

野球部は整列をして皆で礼をする。

「ゲームセット!!」

試合は三越高校の勝ちで終わった。

第五話：初登板（後書き）

この次の回からは少し試合からは離れた話しになりそうです。

第六話：祝勝会

試合が終わった後は結構ドタバタした。

まず、直ぐにキャプテンが先生に呼び出されていなくなってしまった。

多分今後のことだろう。

次に、観客が騒ぎ出してしまった。

わーっわーっ、といつまでも煩くしていたら遂に羽村先輩がきれてダウンの途中で観客の方に突っ込んでいったり。

その後、柔道部と激しい戦闘を繰り広げたらしい。

少し静かになると相手チームは帰って行ったのだが、村田という1年の子がそのとき俺にライバル宣言とかをして来たり。

俺はちゃんと望むところだと言っておいたけどな。

そして、ストレッチが終わり一息入れようかと休んでいると報道部が取材にやって来て俺ばかりに聞くので田崎先輩が暴れ出して皆で止めたりと後いろんな事がたくさんあったのだが、兎に角楽しかった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・

今はキャプテンがやっと解散を告げて、お祭り好きの田崎先輩の提案の祝勝&部の存続会の最中である。

会といってもそこは学生なので某バーガーチェーン店で行われている。いちよう先輩が奢ってくれるらしい。

俺が羽村先輩が竹橋を攻撃して、田崎先輩が相川先輩で遊びだしたのを横目に眺めていると、同じようにそれを見ていたキャプテンが俺の方に歩いてきた。

「いつもあんなんじゃない大変ですね。」

「そうでも………あるかな。でも、楽しいから構わないんだけどね。」

すると、キャプテンがこの店の中のムードとは少し違う真剣な表情になったので、俺はそれにつられて姿勢を正した。

「………今日はありがとう。助かったよ。」

そう言っと、キャプテンは頭を下げたので森下は少し焦りながら言った。

「頭なんて下げないで下さい。周りの人に見られたら絶対俺良い印象は持たれませんから。………それに、俺が詰まんない意地はつたりせずにもっと早くにマウンドに昇ってたら皆が観客に馬鹿にされることもありませんでした。」

キャプテンはそれを聞くと直ぐに顔をあげると、笑って言った。

「そんなことないよ。何でもつと早く?とか思わなくもないけど、
．．．皆、君には感謝してるよ。．．．だから、皆の代表としてもう一度だけ言わせてもらうよ。．．．今日はありがとう。
．．．まだ話したい事はあるんだけど、もうそろそろあの二人を止めないと追い出されちゃいそうだからいくよ。フツ、キャプテンは大変だよ。」

．．．ホントに、良く出来た人だな。

あの二人には少しでも見習って欲しいんだけど．．．。

そして、一人になった彼の所に今度はマネージャーの永谷がやって来た。

「．．．今日はお疲れ様。」

何を言おうか考えた結果この言葉が無難だとの事で選ばれた。

「ははっ、確かに結構疲れたな。もう半年以上も真面目に運動なんてしてなかったのにいきなり7回も投げたんだもんな。」

何気なく肩や足の筋肉を触ったり動かしたりしながら答えた。

「それでも無失点だったんだから凄いよね。」

「そうでもないと思うけど．．．だって最初の方はまだ良かったけど終盤に入ってから急にコントロールも球のキレも悪くなったし、失点してなかったのは皆の力の部分も関係してたよ。でも、もし点取られたりしたら俺羽村先輩に何されてたか分かったもんじ

や無かったなあ。．．．本当に良かった。」
しみじみとそう感じた。

「．．．ほんとに凄いね。一日であの人があそこまで言うようになった事は今まで無かったと思うよ。それに．．．もうずっと前からチームに入ってたみたいに馴染んでるんだもん。」

嬉しくねーな。．．．田崎先輩も一日で、いや恐らく直ぐに喧嘩し始めたんじゃないかと思うけどな。

考えてみたらおかしい話しだよな。昨日までホントに皆あった事無かったんだから。

「俺、今はこんなだけ投げてる時は結構カッコ良かっただろ。．．自分で言うのもあれだけど。」

少し空気が重い感じだったのでこんなことを言ったのだが、言うてるうちに恥ずかしくなってしまった。

「．．．うん。今まで見て来た人の中で一番。プロは抜いてんだけどね。」

当たり前だ。プロと比べられても困る。特に、

「．．．．．英昭選手とか。」

「．ツ！！知ってるの。」

俺が何となく呟いた名前に永谷は素早い反応を見せた。

おそらく頭に思い浮かべた選手と一緒に珍しかったからだろう。そうか、あの人が。それなら俺が勝てる訳ないな。

「知ってるも何も、俺はあの人がいなかったら多分ピッチャーやってないし。それに気づかなかったのか？俺のフォームはあの人をそ

のまま真似てるんだぜ。」

あの人を知ってる人がいるとはな。今まで誰に話しても全員知らないって言うから誰も知ってないんだと思ってたけど、こんな身近にいるとは思わなかった。

「先輩おかわりお願いします。」

「お前少しは遠慮しやがれ!!」

俺は自分の食べ物がなくなったので貰いに行った。

このあと永谷は少しの間座っていたがそのあとは皆に交じっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3159d/>

3カウント～高校デビュー～

2010年10月18日19時40分発行